日本リスク研究学会
The Society for Risk Analysis Japan

2011 Newsletter No.3/4 [Volume.24]
発行日 2012 年 3 月 15 日
発行 一般社団法人日本リスク研究学会
会長 長坂 俊成
事務局 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19 株式会社国際文献印刷社内
日本リスク研究学会事務局 発行責任者・情報管理委員会 瀬尾佳美
TEL：03-5389-3013 FAX：03-3368-2822
mail: sra-japan@bunken.co.jp URL: http://www.sra-japan.jp/cms/

日本リスク研究学会は，日本におけるリスク研究と研究者相互の交流を図ることを目的として，1988 年に米国に本部をもつ国際的なリスクについての学術団体である SRA(The Society for Risk Analysis)の Japan section として発足しました。現在では，米国，欧州，東南アジアの諸学会と緊密な連携をとりつつ独自の活動を展開しています。

1. 本学会会員の春日文子さんが第 22 期日本学術会議副会長にご就任！

文責 関澤 純

国立医薬品食品衛生研究所食品衛生管理部で食品の微生物学的リスク評価の研究を進め、国際的な場でもご活躍中の春日文子さんが昨年 10 月に、日本の科学者を内外に代表する機関である日本学術会議の副会長にご就任されました。女性の副会長としては 3 人目ですが、年齢的にも若く現在バリバリ研究を推進中の方（2007 年の本学会奨励賞を受賞）が選ばれたことは画期的な意味があり、大変でしょうが、お体に無理のないように頑張って頂きたいものです。

お忙しい時間を割いていただき 2 月 3 日に春日様をお尋ねし、副会長としての抱負とリスク研究への期待など伺ってきました。学術会議の開催する講演会の案内は、学会ニュースレターにもその都度紹介されていますので、学術会議の活動の一端は皆様もご存じの事と思います。現在学術会議には、第一部（人文・社会科学)、第二部（生命科学)、第三部（理学・工学）の３つの分野別部会があり、それぞれから計 3 名の副会長がおられ、春日さんは第二部会所属の副会長で、主な任務は国際担当ということです。また大学教育、研究評価システム、高レベル放射性廃棄物など、課題別の委員会がいくつかある中で、春日さんは新たに設置された科学・技術のデユアルユース問題検討委員会で、生命科学の進展に伴う新たなリスクと科学者の役割に科学者が目を向けるための情報発信や行動規範策定の必要性の検討を進め、300 近くある分野別委員会では、健康・生活科学を中心に担当されます。学術会議で今期特筆すべきは、東日本大震災対応に諸学会が活動する中で、「災害に強いまちづくり」、「産業振興・就業支援」、「放射能汚染対策」の分科会ほかで、政治や社会への助言、提言をするとともに、市民への説明の支援を行っていくとのことです。 時間が限られ、あまり詳しくお考えを聞くことはできなかったのですが、生命科学におけるデユアルユース問題や、放射能汚染対策などでは、政府と市民にリスクの考え方を浸透させてゆくことを重視されているとのことでした。本学会としても現役のリスク研究者でもある春日さんを支援し、リスク研究とリスクリテラシーの推進のため、学会としてさらに一層努力を重ねる必要があると思います。なお副会長としての春日さんのメッセージは下記サイトに掲載されています。

http://www.scj.go.jp/ja/sub/index.html

2. 報告

2.1　2011 年度日本リスク研究学会　第 24 回年次大会報告 「リスクと生きる」

大会実行委員長　前田恭伸

第 24 回の日本リスク研究学会年次大会は、2011 年 11 月 18 日～20 日の 3 日間、静岡県浜松市の静岡大学浜松キャンパスにて開催された。今年度のテーマは、3 月 11 日の東日本大震災を受けて「リスクと共に生きる」と設定された。特に 2 日目の 19 日は大雨に見舞われたが、それにもかかわらず約 130 名の会員が参加し、様々な議論を行った。今回は、国際シンポジウム、国際ポスターセッションを設けたこともあって、オーストラリア、韓国、台湾からの参加者もあった。なかでも台湾からは SRA Taiwan の会長、Chang-Chuan Chan 氏も含めて 10 名ほどの参加があった。

1 日目の 11 月 18 日は、夕方から夜にかけて、若手による次の時代のリスク評価を考えるワークショップ「ポスト 3.11.のリスクガバナンスの失敗学」が開催された（詳細は別の記事に譲る）。

2 日目（11 月 19 日）は、午前中に国際シンポジウム、午後にポスターセッションとふたつの学会主催特別セッション「東日本大震災」、それに静岡大学防災総合センターの牛山素行氏による特別講演が開催された。国際シンポジウム Risk analysis from Asia-Pacific perspective では、オーストラリアから Daniela Leonte 氏、台湾から Kuen-Yuh Wu 氏、韓国から Dong-Chun Shin 氏、そして日本からは池田三郎氏が登壇し、それぞれの立場からアジア地域における様々なリスクについて発表を行った。

特別セッション「東日本大震災」は二部構成で開催された。第一部は「リスク学から見る「想定外」：LPHC リスクのアセスメント・ガバナンス再考」というテーマで、池田三郎氏（筑波大学名誉教授）を座長とし、木下冨雄氏（国際高等研究所）、小林定喜氏（放射線医学総合研究所名誉研究員）、東海明宏氏（大阪大学大学院）、村山武彦氏（早稲田大学）をパネリストとして、議論が行われた。第二部は、「東日本大震災からの復興の課題と対応：リスクに協働して対処する側面から」というテーマで、盛岡通氏（関西大学）が座長となり、話題提供者として長坂俊成氏（防災科学技術研究所）、伴信彦氏（東京医療保健大学）、討論者として関澤純氏（食品保健科学情報交流協議会）、土屋智子氏（電力中央研究所）にご参加いただき、討議を行った。いずれもリスク学の研究と実践の進め方に再考を迫るトピックであり、活発な議論が交わされた。

3 日目（11 月 20 日）は、会場を 4 つに分け、１１の個別セッションとひとつの企画セッションを開催した。特に会場のひとつは震災についての発表を集めた場所となり、またそれ以外の会場でも地震、津波、原発事故をトピックとする発表が少なからずあった。やはり今回の年次大会では、東日本大震災が共通のトピックとして大きな位置を占めることとなった。

3 月 11 日の東日本大震災は、リスク学に多くの反省点と課題をもたらした。今回はそれを踏まえて様々な活発な議論がなされた。ただ、課題があまりにも大きく、3 日間の議論では消化しきれなかったように思う。また東海地震の想定震源の真上での大会の主催者としては、東海地震のリスクをあまり取り上げることができなかったのは、残念である。

図１　会場となった静岡大学システム工学棟

図２　国際シンポジウムでのDaniela Leonte氏

2.2　SRA Annual Meeting の楽しみ方：2011 アメリカリスク学会参加報告

産業技術総合研究所　安全科学研究部門　小野恭子

2011 年 12 月 4 日から 7 日, 米国サウスカロライナ州チャールストンにて開催された, Society for Risk Analysis 2011 Annual Meeting に参加した．暖かで過ごしやすく，12 月にもかかわらず学会会場には冷房が入っているほどであった．チャールストンは漁港が近いそうで魚介類が美味しく，2 日目の Luncheon では鮭のムニエルをいただいた．

筆者は本学会の参加は 3 回目である．正直，1 回目 2 回目は英語の壁が高く右往左往していたが，3 回目にしてようやく余裕が出てきた．私がどのように今回の SRA を楽しんだかを書いてみようと思う．極めて私的な視点であることはご理解ください．

１）新しい考え方に触れる

筆者の知る限り，SRA はリスク評価手法の高度化に関して最先端の議論があり，日本の学会ではほとんど出てこないアプローチに触れられる貴重な機会である．今回は，全米科学アカデミーNational Research Council（NRC）より 2008 年に公表された Science and Decisions: Advancing Risk Assessment（いわゆる“Silver Book”）の“その後”についてのセッションが充実していた．特に，化学物質の有害性評価の精緻化と合理化のバランスに関する話題たとえば Hattis らのグループでは，様々な化学物質で半数影響濃度と最小影響濃度の比を整理することで不確実性係数の幅について発表した．それに対し，毒性学のバックグラウンドを持つ研究者からは「作用機序を無視したような外挿法は受け入れがたい」などのコメントがあり，場は白熱していた．現実の細かい機序を評価手法にどこまで反映させるか，そのへんのさじ加減が難しいことを痛感しつつ，不確実性係数を現実に適合したものにしようという心意気にはこちらも良い刺激を受けた．

２）ミーハーに徹する

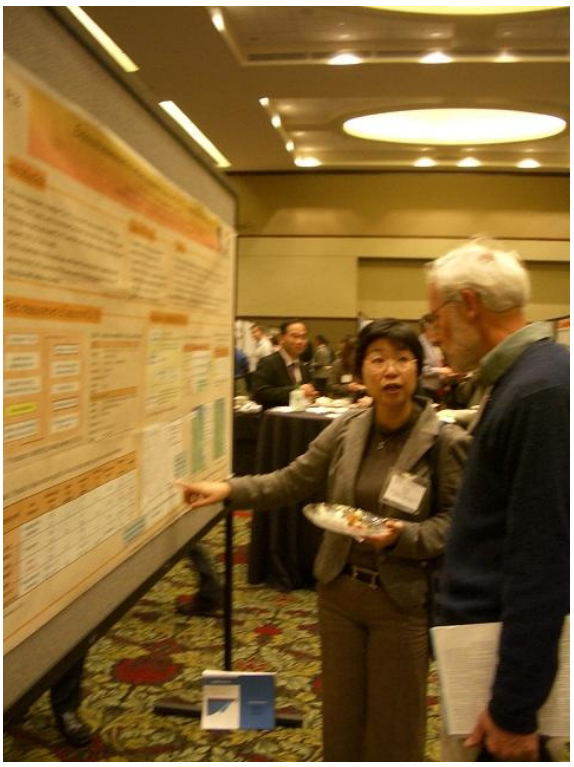
論文でしか名前を見たことがない，リスク研究の大御所に会えるのもこの学会の面白さである．上記のセッションで言えば，Dale Hattis に加えて，確率論的リスク評価の大家 Roger Cooke や，米国 EPA 時代に不確実性係数の考え方をリスク評価に組み込んだ Michael Dourson の発言も聞くことができた．また，PM2.5 規制の根拠に疑問があると発表した Tony Cox（彼の発表は立ち見が出た！）にも会えた．

３）日本に帰ってからも余韻に浸る

会場ではライブ感を楽しみ，調べ物は最低限で過ごしていたので，帰国後のフォローが重要かもしれない．仲良くなった研究者からもらった別刷りをじっくり読んだり，お礼メールを書いたりすることの他に，学会で興味を惹かれたキーワードを検索サイトで検索してみたりもした．論文サーチでなく一般の検索サイト，というところが重要で，米国環境保護庁やエネルギー省のウェブサイトに飛ぶことが多い．普段は敬遠しがちな堅苦しい英語の文書も，SRA の直後であれば内容もすっと頭に入るような気がするから不思議なものである．こういう SRA マジックが，いつまでも続けばよいのだが・・・．

こんな感じで自分のリスク研究の幅が広がる（＝強制的に広げる）場として，SRA Annual Meeting はおすすめである．来年はサンフランシスコでの開催だそうで，筆者も今から予定を空けて楽しみにしている．

会場の Embassy Suites North Charleston 入り口．リゾートホテルといった様相でした．



ポスターの前で説明する筆者．うかうかと飛び回ってばかりではありませんでしたので念のため．
写真提供：瀬尾佳美氏

3. 委員会報告

3.1　リスリスクマネジャ認定委員会からの報告

関澤　純

社団法人化に伴う各種規定の整備についての理事会の方針に沿い、これまでに作成した規定案を理事会の検討に基づき、かつ他の委員会と整合性を持たせるため、新たに当委員会の規定と内規の案を作成し、３月２９日の次回理事会前に最終案とすべく委員に諮っている。

昨年の浜松学会年会で委員会を開催し、今後の活動の基本的方針について協議した。

（３）現在の委員は今年で２年目の任期を終えるので、新委員候補の自薦、他薦を募っています。リスクマネジャ認定委員会は、以前にはプロジェクト認証を中心的に行っていたため現在の名称となっていますが、今後は本学会が内外に向けて、リスクの考え方の基本と実践について普及して行くことを新たに大きな柱としようとしています。ＳＲＡや他学会でも学会員や社会向けの教育活動に多大の努力を払っていますが、日本社会が抱える多様かつ大きなリスク問題の解決に、本学会が会員の研究成果を反映させることが強く求められています。推薦やほかの御意見は関澤(jsekizaw@tc.catv.ne.jp)までお知らせください。

3.2　表彰委員会報告

坪川博彰

日本リスク研究学会　表彰委員会報告

平成２３年度日本リスク研究学会の表彰委員会は、以下の委員構成で運営を行ってまいりました。
片谷教孝（桜美林大学）
岡田大志（関西学院大学）
村山武彦（早稲田大学）
吉田喜久雄（独立行政法人　産業技術総合研究所）
内山巌雄（元京都大学）
坪川博彰＊（独立行政法人　防災科学技術研究所）　　＊委員長

学会賞および奨励賞の審議経過
日本リスク研究学会賞は、学会に５年以上継続して在籍し、学会活動および研究活動に顕著な業績を上げた会員が受賞することとなっています。平成２３年度は９月８日に学会ホームページに掲載すると同時に、メールにより会員に周知いたしました。推薦の締め切りは１０月１８日といたしましたが、期限内に学会賞および奨励賞それぞれ1名の推薦がありました。
表彰委員会での審議の結果、学会賞候補者、奨励賞候補者ともに全員一致で推挙するという結論にいたりました。審議結果は速やかに理事会に報告し、理事会での審議の結果１０月２６日に以下のとおり決定されました。

学会賞　土田昭司　会員　（関西大学　社会安全研究科・社会安全学部）
奨励賞　桑　詩野　会員　（独立行政法人製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター）

大会発表論文賞の審議経過
規定に従い、応募論文のうち口頭発表のものについては各座長に推薦をお願いし、ポスター発表のものについては表彰委員会において審議いたしました。座長からは５篇の論文の推薦を受けました。ポスター発表は

２編を審議の対象といたしました。審議の結果、以下の２編が大会発表論文賞にふさわしいとの結論に達し、理事会に推薦いたしました。

大木聖子「東日本大震災の巨大津波がもたらしたリスク判断への皮肉な効果」
宮地由芽子「鉄道の運行障害・事故に対するリスク認知の構造」

表彰委員会における審議経過に関して簡単に説明を行います。
まず、大木論文ですが、本年度に発生した東日本大震災については従来の防災科学の限界が問われる中で、適切なリスク情報とはどうあるべきかを考えるために避けて通れない論点を扱ったものとして、時宜を得た研究としては委員全員の見解は一致しました。分析対象者に関するあいまいさや、論文としての完成度に課題はあるものの、低頻度型の大災害への対応が急務となっている現状からして、きわめて重要な点を指摘していることから、全員一致で推薦となりました。
次に、宮地論文ですが、まず論文としての体裁が最も整っており、丁寧に基礎資料の分析から積み上げて構成されている点は委員から高く評価されました。一方で鉄道事故というさまざまなバイアスが複雑に絡み合っているリスクを題材としているだけに興味深い一方で分析がまだ十分とは言えず、今後より精査した研究がなされることに期待する意見が多くありました。このような課題はあるものの、より良い研究につなげるための一歩として、今回は大会論文賞として推薦することとなりました。
そのほかの論文についても検討を進めましたが、さまざまな事由から上記２論文ほどの高い評価となりませんでした。表彰委員会としては上記2編を推薦することとし、理事会に報告した結果、11月26日の理事会にて承認されました。

なお、大会論文賞の受賞者には、この受賞を機会にぜひ査読論文として本学会誌に投稿され、より多くのリスク学研究者、実務者の目に触れ、社会的に有益な学術研究として昇華されますよう、表彰委員会としては強く期待していることを昨年に引き続き申し添えます。

4. 事務局便り

１．事務委託先の変更

本学会が 2010 年度から一般社団法人として活動を始め、理事会ではかねてより学会事務の適正化ならびに効率化を検討してきましたが、昨年 11 月 19 日の臨時総会における定款変更案の承認を受けて、2012 年 1 月 1 日より事務委託先を変更いたしました。

新しい事務委託先は、以下の通りです。
〒169-0075　東京都新宿区高田馬場 4-4-19
株式会社　国際文献印刷社内
一般社団法人日本リスク研究学会事務局　担当：木崎直美
TEL：03-5389-3013（本学会専用）　FAX：03-3368-2822

E-mail: sra-japan@bunken.co.jp

２．学会費の振込み

2012 年度の会費の振込み依頼が既に事務局から発送されております。国際誌である Journal of Risk Research（JRR）の発行頻度の増加に伴い、国内誌と国際誌の両方を購読される場合は、会費が変更になっています。用紙に記載されている金額をご確認のうえ、振込をお願いいたします。

３．会員専用ページの開設（2012 年 4 月開設予定）

このたび、日本リスク研究学会では会員の学会登録情報（所属・連絡先・メールアドレス等）に関して、インターネットを経由した情報更新システム＜会員専用ページ＞の導入を図り、2012 年 4 月下旬からの開設を予定しております。

本システム導入の利点は、会員専用ページでの、現在の登録情報の確認・変更、年会費納入状況の確認が挙げられます。

各会員の ID/パスワードは、学会費の振込み用紙をお送りした際に同封しています。

＜会員専用ページ＞の開設は，2012 年 4 月下旬の予定です。それまで、ID／パスワードが記載された書類は、大切に保管していただくようお願い申し上げます。開設の際には改めてメールで連絡いたします。

４．日本リスク研究学会第 25 回年次総会および春期シンポジウム日程のお知らせ

日時：平成 24 年 6 月 17 日（日）
総会 13:00～14:00
シンポジウム 14:00～17:00（終了予定）
場所：東京大学山上会館
東京都文京区本郷 7 丁目 東京大学本郷構内（三四郎池隣り）

5. 編集後記

東日本大震災から早くも一年です。なかなか進まない瓦礫の処理など復興の遅れが気になります。今年豪州で行われる WCR では、東日本関連のセッションもいくつか企画されています。

青山学院大学 瀬尾佳美